

サラリーマン家計からの転身 ～漁家生活を支えて～

笠岡市大島漁業協同組合女性部
部 員 坂 本 美 由 紀

1 地域の概要

私の住む笠岡市は岡山県の南西部に位置し、西は広島県に接する人口約6万人の市で、“生きている化石”カブトガニの生息地・繁殖地として全国的にも知られている。笠岡市北部の水田地帯は、そのほとんどが安定兼業地域で、南部の1200haに及ぶ笠岡湾干拓地では酪農や野菜、花などの大規模な農業が行われている。

また笠岡市には約30の島々からなる笠岡諸島を有し、そのほとんどが瀬戸内海国立公園に指定された風光明媚な地域であると同時に、高島や白石島、北木島、真鍋島などの島々は豊かな歴史や文化に恵まれた特色ある地域としても知られている。本土の沿岸部やこれらの島々の周りは古くから好漁場として知られ、漁船漁業の盛んな地域である。(図1)

2 漁業の概要

笠岡市の沿岸部の東端に位置する笠岡市大島漁協は、正組合員40名、准組合員58名、計98名と、他と比べ組合員数は少ないが、組合員間の意思の疎通が図られ、よくまとまった組合である。

漁業の形態は小型底曳網、小型定置網等の漁船漁業と海苔養殖、組合自営の養殖等で、特に藻貝(サルボウ)養殖は海の環境条件にも適応して昭和30年頃から本格化し、現在では冬場の収入源として定着、後継者の確保にもつながっている。また、近年本格的に観光漁業としてのアサリ養殖にも取り組み、漁場に砂を入れるなどの環境改善を行いながら、国民の共有財産でもあるカブトガニとの共存共栄を目指している。(図2)

3 笠岡市大島漁協女性部の組織と運営

笠岡市大島漁協女性部は27人で構成されており、平均年齢は61歳と年々高齢化が進んでいる反面で若年部員の加入も見られる。

女性部の活動は、組合で購入した海苔を味付け海苔や焼き海苔に加工し、販売した収益金を活動費に充て、海辺の清掃活動や自らの資質向上を図るための学習会・講演会への参加を行っている。

特に、笠岡市の協力を得て平成9年から実施している「海辺の教室」は、地元の子供達や保護者を対象に、魚のさばき方教室や子供せり市などを通して“漁業や地域の良さを再認識する”“魚の地産地消”を進めていく上での意義深い取り組みとなっている。この教室を通じて、女性部員と地域の子供達との交流が深まり、子供達に魚を知ってもらうことで魚や漁業に興味をわいたり大きな成果を納めている。

参加した子供達からは、「魚の獲り方を初めて知った」「魚のさばき方が面白かった」な

どの感想がたくさん寄せられた。今後は海から離れた山あいの子供達を招待し、漁業への理解を進めていきたいと話している。(図3)

4 課題選定の動機

私が主人とともに漁業を始めたのは、今からちょうど1年8ヶ月前の平成14年7月であった。それまで主人は電気工事士として15年間、私は写真店で8年間勤めていて、ごく一般的なサラリーマン家庭であった。そのような中、転機が訪れたのは、主人の父や弟が大島漁協で漁業に携わっており、特にその弟から、漁業はやりがいのある仕事で、頑張ればそれなりの収入も得られるという強い勧めがあったからである。

それでも全く未知の漁家へのトラバークは、色々な面で不安でいっぱいだった。

5 活動の状況

現在家族は主人と私、中学2年生、小学6年生、3歳の3人の娘達がいる。漁業を始めた当時、上の子2人は手が放れていてさほど心配はなかったが、末娘はまだ2歳になったばかりだった。それまでとは違い、子供達に接する時間が急に減ってしまったせいで、まだ甘えたい盛りの末娘は精神的に不安定になり眠りが浅くなってしまい、朝、主人の仕度のために4時半に起床する私と一緒に起きてそばを離れなかった。それでも主人の仕度をして送り出し、子供達の朝食を作り、末娘の保育園の仕度を済ませた後、せりの準備のため、朝7時には私も家を出なければならない。その後の子供達のことは、実家の母に頼んで来てもらい、バトンタッチするが、末娘は私に置いて行かれることが辛く、1年たった今でも毎朝泣き出す始末である。この仕事を始めて、自分の体が2つあったらと何度も思った。(図4)

また、就業に合わせて購入した中古船は、予想以上に修理代がかかり、必要な漁具などへの出費に加えて、建てて間もない家のローンがあり、支払はまだまだ大変である。さらに漁業を始めるに合わせて、底曳きの網を仕立て、用意しなくてはならない。それでも魚の入りが悪いとその都度、網を改善していかなくてはならなくて、どんな網に仕上げようかと毎日四苦八苦である。(図5)

また朝市での魚の仕分け方や、売り方も初めての経験で大変だったが、主人の母に助けてもらいながら何とか一人でできるようになった。(図6・図7)

6 波及効果

こうして何もかも初めての経験で挫けてしまいそうになったこともあったが、漁協の皆さんの助けや家族の支えがあったお陰でどうにかここまでやってくることができた。

漁業は同じことの繰り返しではなく、毎日が新鮮で新しいことの連続である。今では毎日の漁獲高や獲れた魚の種類に一喜一憂し、それがそのまま収入に跳ね返ってくるやりがいと面白さを肌で感じている。また、朝市の活気が私に元気のパワーを与えてくれる源になっている気がする。もちろん子供達の笑顔もだが・・・

7 今後の課題

また、漁業に携わるようになって、一番感じたことは、網にかかるゴミの多さである。

空き缶やビニール、更には不法投棄された家電製品などの粗大ゴミによって網が破れたりすることもある。海水浴客や釣り人などのレジャー客のモラルやマナーのことも含めて、漁業者から広く世間に切実に訴えていかなければならないし、漁業者はもとより、一人一人が海を守る気持ちを大切にしていかなければならない。

また、網にかかったゴミを持ち帰って処理できる施設や場所を整えば、網にかかったゴミを持ち帰る漁業者が増え、漁場環境も改善されていくのではないのかと思われる。施設の整備などについては、県や市の行政的な配慮を是非お願いしたいと思っている。(図8)

また、漁業者の減少や高齢化が叫ばれているが、私達のようなサラリーマン家庭からの転職組においても周囲の皆さんの協力がなければ就業は難しいことであり、今後、漁業を新たに始める人達には、やはり周りからの指導と協力は欠かせないと思う。多くの支援を受けることができれば、それだけ新規着業者も増えてくるのではないだろうか。

まだ、将来について考える余裕などないが、大島の魚をもっとPRして、美味しい地物の魚として消費者の皆さんの食卓を賑わすことができれば素晴らしいことだと思う。

また、今後も女性部を中心に、次代を担う子供達を対象とした魚食普及活動に積極的に取り組み、漁業体験や魚料理教室を開催し、魚の料理方法を教え、新鮮な地物の魚料理の美味しさを実感してもらいたいと思う。(図9)

また、漁家の経営を預かる主婦として、収支を把握していくために、パソコンによる漁獲高の管理などこれから勉強していきたいと思っている。現在でもインターネットでその日の波の状況や天候の推移はチェックしているが、今後はより一層、パソコンを活用してインターネットを始めとした情報収集を進め、我が家の漁業経営の確立を図ると同時に、私のパソコンの知識が組合の皆さんや地域の皆さんに少しでも役立ち、貢献ができればと考えている。

そして漁業は危険との隣り合わせの仕事である。主人が出港してから帰ってくるまではいつも心配で、操業中の安全確保は最も重要な課題である。これからも主人共々健康で、生き生きと漁業に取り組み、少しでも大島の漁業の発展と地域の活性化に貢献できればと考えている。(図10)

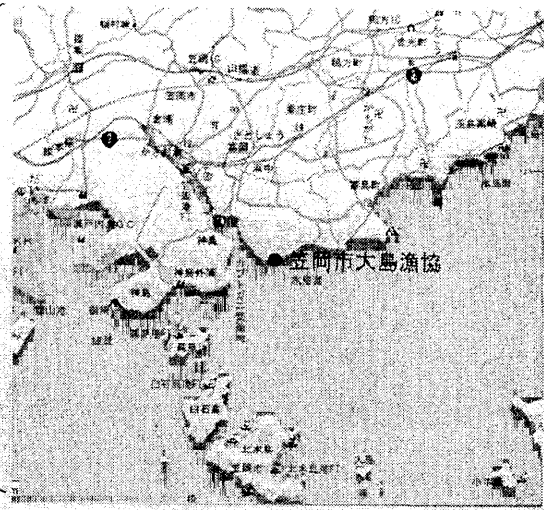
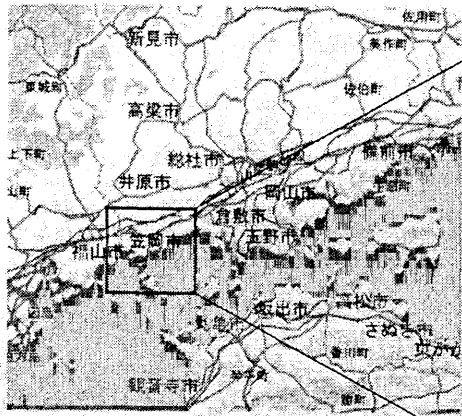
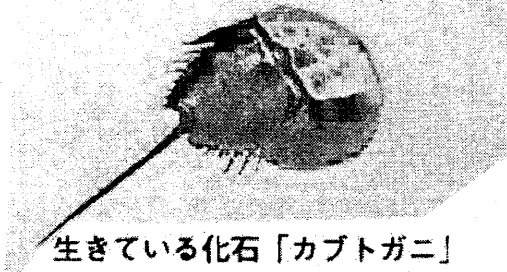


図1 笠岡市大島漁協の位置図



生きている化石「カブトガニ」



図2 藻貝漁の様子



図3 大島海辺の教室の様子

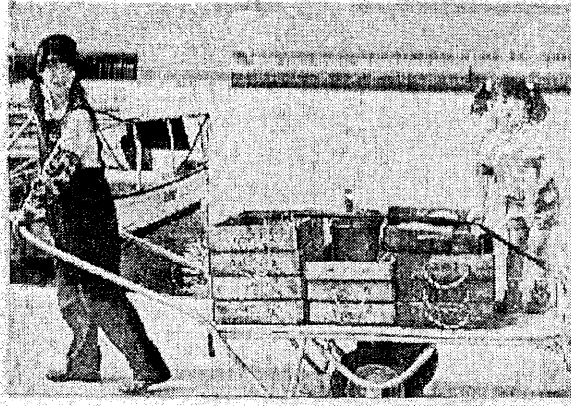


図4 末娘を連れて仕事に出ることも



図5 網を縫っているところ



図6 魚の仕分けをしているところ



図7 朝市の様子



図8 網にかかったゴミ



図9 女性部の魚料理教室



主人共々

健康で頑張ります！

図10 家族の写真